

2012年

# 海に捧げるうきアート

浅野 恵美子



玉城の浜辺の朝

## はじめに

ここで紹介されているうきアートは、母船などから離れて、近くの浜辺に打ち上げられ、絵を描かれて変身したものです。

沖縄の近海から、また、東北や北海道から、あるいは、韓国や中国から流れてきました。それはうきに描かれている文字から分かりました。

拾った場所は、多くが近所の浜辺やビーチ（玉城、百名、奥武）です。

宮古島の池間大橋側の輝く海の浜辺にもたくさんさんのうき達が流れ着いて、それを持ち帰ったこともありました。

百名の浜の向こうにある久高島に行って、真っ白に輝く浜辺に打ち上げられているうきもつれて帰りました。

神の島と言われる久高島は、食べ物を除いて、石ころといえども持ち出し禁止ですが、流れついたものは持ち帰っていいとのことでした。

友人が山原（名護）に遊びにいったおみやげに6つも拾ってきてくれたこともありました。

ごみにされてしまううきたちが、色を塗ることで輝いていくのを見るのは大きな喜びでした。

そして、それを海や自宅において写真を取りました。  
それが、自分と地球をつなげる祈りのアートになりました。

みてくれた方々が「面白い」と言ってくれたので、気をよくして、描き続けることができました。

描き続けることで、自分の内部で何かが変わっていきました。  
海から大きな力をいただいていると思います。

2012年 5月吉日 浅野 恵美子

## 目次

はじめに

1. 玉城の輝く海・・・4
  2. 玉城イノ一の海にうきをおいてみる・・・7
  3. 竜宮神にささげるうきアート・・・12
  4. 祈り&ヒーリングアート・・・16
  5. ヤハラツカサにささげるうきアート・・・22
  6. 自宅の内と外でのうきたち・・・26
  7. ヒーリングアートとしてのうきアート・・・37
- 著者の自己紹介・・・38



## 1. 玉城の輝く海



みいばるの海の朝



玉城イノーの海にかかる虹



奥武島・竜宮神の海



大雨水が流れ込んだ海岸



奥武島から見えた太い虹



みいばるビーチ

## 2. 玉城イノーの海にうきアートをおいてみる



玉城イノーの浜辺の真ん中に立つ「倒れ石」

## 遠くまで広がるイノーの浜辺

浜辺のど真ん中に「倒れ石」と呼ばれ、遠くからみると鳥に見える石がある。

その石を私は「ドラゴンまま」と呼んでいる。

雨風にさらされてゴツゴツしているが、草も生えている巨大な岩。

満潮の時は、海の中に

干潮の時は、浜の中心にたっている。

そこで何をみてきたのだろうか。

そこに何年立っているのだろうか。

「ドラゴンまま」は、何があっても動かず、暑さや寒さ、雨風に耐えてきた。

また、何年も何年も雨と風と太陽と月の輝きを受けてきた。

側に立つと、悠久の時間が開かれる気がする。

誘われて、私の過ぎ去りし小さき過去たちも現れ、消えていった。

干潮の朝、「ドラゴンまま」の下は、小さな池となる。

その池に、海の向こうから光がさし、さざなみがたっていた。

うきアートをおいて、記念撮影。

うん、とても似合って、岩もうきも輝いてビューティフルだ。

注；イノーとは、珊瑚礁に囲まれた浅い穏やかな海。「海の畑」とも呼ばれ、海の幸などを与える豊かな場所である。





(干潮の時の倒れ石の下、向こうは海)



(干潮の時の倒れ石の下、向こうは陸)



(玉城イノー浜辺の浅瀬)



(玉城イノーの浜辺の砂浜側)

このイノーの浜で海の向こうをじっとみつめていることが好きでした。  
今でも好きです。  
ずっと好きでしょう。

なぜ、かくも海をみるのが好きなのか、わかりませんでした。  
遠くをみることでなぜか落ち着きました。  
目の前のことばかりに翻弄されてしまうからでしょうか。

この海は、今、住んでいる家からも見える海です。  
干潮の時には、イノーの岩場を奥へ奥へと水辺まで散歩します。  
足を海水に浸して歩くことも大好きです。  
海に誘われて、全身を浸すことになったこともありました。  
海水につかると、気が流れ、浄化されるそうです。

悠久の時間を感じさせる海、それだけでも幸せです。  
海をみることで、心がリセットできたこともしばしばありました。

海は、今なお謎です。

けれど、雨の日も、風の日も、嵐の日も、晴れた日も、  
朝も、昼も、夜も、月夜の晩も  
いつも愛しているのです。



### 3. 奥武島・竜宮神ささげるうきアート



奥武島竜宮神

ここは、龍が立ち寄るとされる奥武島の祈りの聖地。

龍とは、神の化身、自然エネルギーであるそうだ。

そこで、「龍がいま、そこにいる」と話すシャーマンもいた。

なぜか、岩と神はいつもつながっている。

石は、魂（意志）であり、岩は不動の変わらぬ神である。

そこに立ち、海風をうけ、岩パワーをうけると、心が強くなる。



躍動する地球(竜宮神上方)



ワンネス(竜宮神下方)



子どもマンダラ(竜宮神上方端)

竜宮神の岩に「子どもマンダラ」と呼んでいるうきを置いてみた。

この写真をみた友人が、「あなたが描くような観音様」が見えると言う。

どこに？・・・？・・・？

見えるようになるのに時間がかかった。

見える人と見えない人がいる。

海の波影から浮かび上がる観音のやさしい顔が見えるかな。

人は、同じものをみても自分の関心があるものを見つける。

観音様、現れてくれてありがとう。



ワンネス(竜宮神下方)

この絵は、指で大日如来の「ワンネス」の形を描いたつもりだ。

すべては一つ、繋がっているとのは考え方は、独りぼっちの心を解放する。

何の力もない私でも、何かの役にたっているかもしれない。

複雑につながっている蜘蛛の巣の一部が動く時、全体も影響を受ける。

みんなつながっているから、ひとりの小さな変化も全体を変えているはず。

ちっぽけな私でも、愛と平和の波動を流せるかも知れない。

ワンネスの思想は、勇気と力を与えてくれる。

#### 4. 祈り&ヒーリングアート



「よみがえる愛」自宅リビング

震災のニュースでゆれてしまう弱い自分を変えたい、不動の岩のように強い自分になりたいと空に立ち上がる岩を描いた。

ところが、それは傷つき、暴れ苦しむ大地のようであった。

そこで、「ウオーツ」と大きな声をあげて、地球と人々の苦しみを身体で表現を試みた。何度かやっているうちに、感情が湧いてきて、涙がはらはらと流れた。

やっと泣けたので、救いのパワーの天使を描き加えていった。

そして、祈り・愛を送る意味で、また一人で大声をあげて表現した。

こうして、うきアート「よみがえる愛」ができた。

(心の宇宙散策56号 2011年)

黙っているだけでは、心は同じ所に止まってしまう。特に、他者の痛みを見ながら何もしないでいるのは息苦しい。アートで表現したり、言葉にしたりすると前に進んで、少しは、立ち向かっていく強さ、やる気が出てくる。





地球を抱く

素顔の力強い女でありたいと願った。

すると、服が朱色の力強い絵になった。



6月23日

6月23日は、沖縄の終戦記念日である。  
その日の前後には、学校で、新聞やテレビで戦争のことが盛んに語られる。  
語られないできた体験が、どんどん出てくるのを見聞きするのは驚きだ。

戦争が起こったら大変だ。  
戦争はぜったい起こしてはならない。  
今、私たちの目の前では、戦争は起こっていない。  
しかし、見えない所で、人の心の中で、すでに戦争は起こっている。

いじめと恨みの連鎖、我執からの争いは、なかなか終わらない。

それぞれの内側なる戦争が終わることが重要である。  
自己の内なる平和を求めずして、平和を叫ぶのは虚しい。



母の祈り

京都のある彫刻家の作品(写真)をみて感動した。

それをうきに模写して描いてみた。

うきに描くには、スペースが足りない。

それに、私の力では、その彫刻の気品はまったく出せない。

そっくりでない方が自分らしい絵になると開き直った。

髪もぼさぼさに描き、絵からどんな意味がうまれるのかと見つめている。

そうだ、閉じていた母子の卵が孵化して、新しい世界にでて来るのだ。



躍動する地球(3階テラス)

家のブーゲンビリアの花は、1階から上へ上へと3階まできた。

夫がせっせと世話をしたお蔭もある。

土地のパワーもあるのだろう。

その輝く花はっばは、どんどんおちて、どんどん花をつける。

桜吹雪ならぬブーゲンビリア吹雪にもなる。

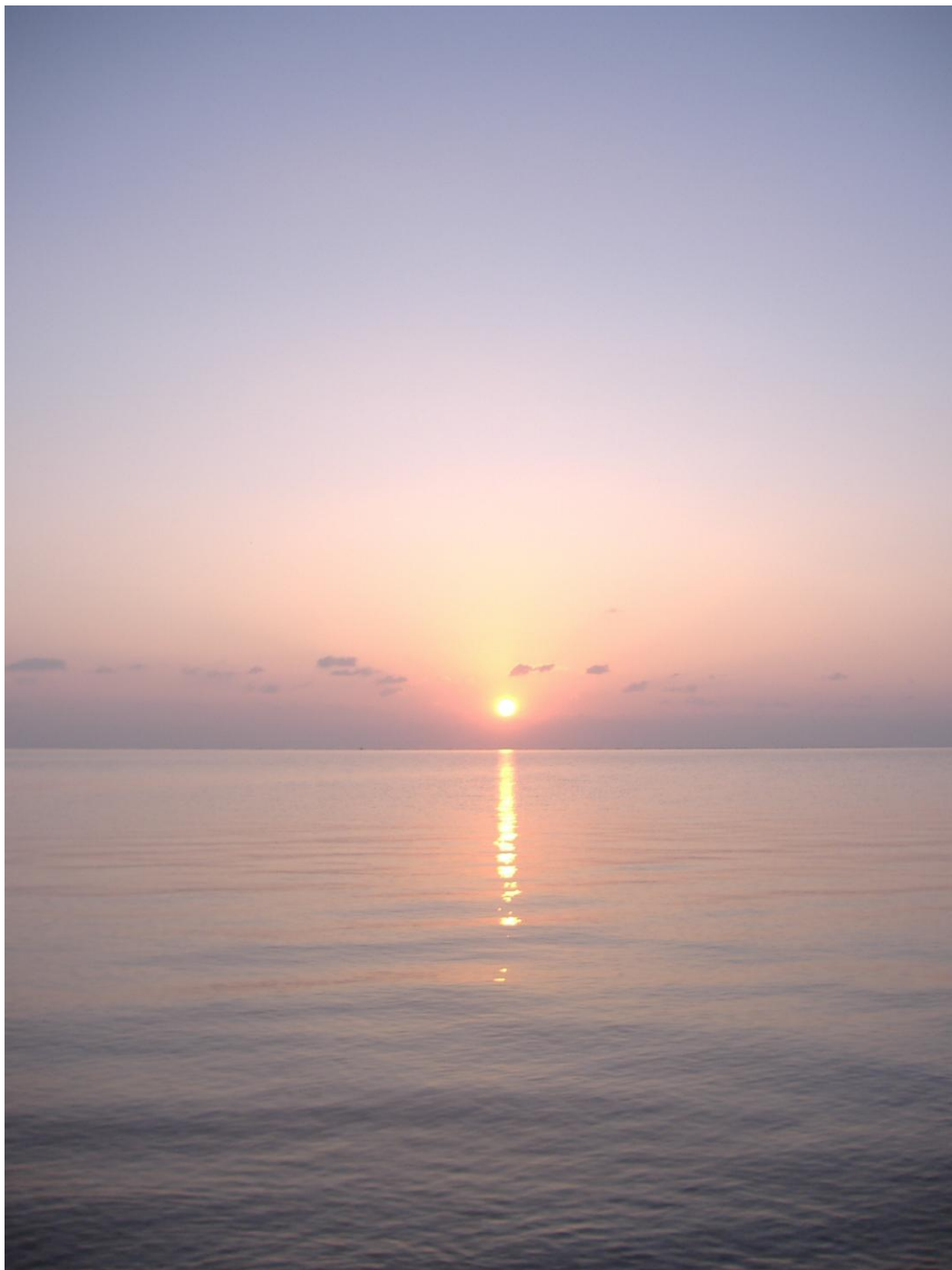
絵は、うきの表面にある小さな傷線からイメージをみつけて描いた。

地球への私の祈り、あこがれが出たようだ。



エンジェルになった息子

5. 百名・ヤハラヅカサに捧げるうきアート



百名の朝日



ヤハラヅカサ



海側からみたヤハラヅカサ、上方が浜川御嶽

この百名のビーチは、昔、子どもたちが小学生だった頃、

仕事を終えてから、息子と娘をつれて、よく泳ぎにきた所だ。

縁あって、近所に住むようになってからは、散歩コースの一つである。

ある時、まっしろな珊瑚の石の山に驚いた。

「ここは、珊瑚の墓場？」と心の中で呟いていると、

「物語の始まりの場所だ」との内なる誰かの声。

「そうか、珊瑚の新しい物語がもう始まっているのだ」と理解した。

けれど、実は、沖縄の神話—あまみきよ（アマテラス？）の上陸地点、  
ヤハラツカサであった。

すぐ上の浜川御嶽にも静かな聖なる空気が満ちている。

あまみきよの一団は、上陸当初、浜川御嶽に住んでいたそうだ。

そこは、また、「火の神」が祭られている所でもある。

多くの神人たちが、ここを訪れて、祈っている。





月を抱く女神



満月の美

## 5. 自宅の内と外でのうきたち



奥武島から見える我が家(森の中のコンクリートの家)



子どもマンダラ(1階の庭)



憧れの弥勒(1階のウッドデッキ)



愛を奏でる女(3階玄関前)



春の喜び(3階テラス)



天国(3階テラス)



銀河とエンジェル(3階テラス)



無題(自宅2階の庭)

あなたは、少し暗い庭の片隅で、なぜかぴったりだった。  
「ここが私の居場所よ」とでもいうかのようにだった。

雨風で色があせたが、色を加えるとますます輝いた。  
じっとみつめていると、後から女の人が「うふふ・・・」と顔を覗かせた。

もしかして、エンジェルがいるのかな。



妖精のいたずら(1階畑まごうの木)



洞穴の神秘(廊下)



物語の扉(1階庭への階段)



父母子関係(1階庭)





満月の喜び(屋上)

ここは、我が家の屋上。  
月光をあびておしゃべりする女たちがいる。  
夏の夜、熱くなった屋上コンクリートの上に箆をしいて  
仰向けになって、空、満月、星々をみると、  
背中であたたかく、気持ちがいい。

そんな楽しい思い出がうきアートになった。  
満月の夜は、空と月と海と風で、心が騒ぐ時だ。



然生作(小3) 三つの頭を持つ怪獣



陽来作(小5) (春休みの遊び)



誠作(夫)3階通路橋下



無題(橋下の2階の庭)



遊ぶ(玄関への橋通路)

## 7. ヒーリングアートとしてのうきアート

うきたちは、日本海の広い海を、つながれていた母船などから離れて、どんぶら、どんぶら、旅をしてこの浜辺に打ち上げられたのだ。

うきには、大きさや色などいろいろあり、さらにいきた貝がびっしり付いているものやかなり傷ついているもの、まったく汚れのないきれいなものまでいろいろであった。

まだ使えるのにゴミとしてすてるのはもったいない、何かに活用できないか考えた。

そして、うきをキャンパスにして絵を描くこと思いついて始めたのである。

絵を描くのを楽しんでいるうちに、これは、ニライカナイからやってきた神聖なものだと思えたりした。

きれいに洗って、アクリルで好きな藍色をぬってみると、球体は輝き、わくわくした。

うきが、海や地球とつながって感じられ、いとおしい気持ちになった。

うきをみつめ、好きな弥勒菩薩を模写したりして、聖なる存在に近づこうとした。

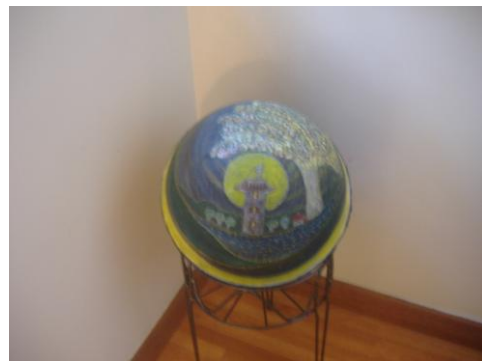
うまく書けないものの、模写することで何かが育っていった。そして、書きたいものが出てきて、球体の不思議や色の世界に開かれていった。

絵になったうきを海に浮かべてみて驚いた。あたりまえのことなのに、海に浮かび、風と波にのって流れるのだった。

それからは、うきを海や家の周辺において写真をとるようになった。心が退屈した時、ウキに絵を描いていると時間を忘れていた。

球体と向き合い、色遊びの楽しさにはまり、地球への思いが深くなった。

思えば、ゴミとなっていたうきを拾い、洗い、色をぬって輝かせる営みは、実は自分自身の浄化でもあったのである。



## 著者の自己紹介

1947年 沖縄県平良市（宮古島市）生まれ。旧姓名 根間恵美子

1966年 お茶の水女子大学家政学部児童学科に入学し、大学院を含め6年間学ぶ。  
松村康平教授（故人）のもとで、心理劇・関係学・児童臨床学等を学ぶ。  
キリスト教短期大学、愛知みずほ大学短大部で奉職。55才で退職。

2003年10月より愛知から沖縄県玉城村へ移住。

夫と二人暮らし。息子夫婦と孫3人は鹿児島。娘夫婦は愛知。

2012年現在、沖縄リハビリテーション福祉学院講師（非）、  
沖縄女性財団(ているる)「心の健康相談」相談員  
沖縄キリスト教学院大学・短期大学カウンセラー&講師（非）、  
日本心理劇学会理事、日本関係学会運営委員  
沖縄保育問題研究会会長  
沖縄ドラマ教育研究会役員

得意分野 教育心理劇・カウンセリング・保育学・児童心理学



著者 グスクロード公園



「浜辺の茶屋」前・イノーの浜辺

発行 あさの人間研究所(浅野 恵美子)